

特定非営利活動法人 太平洋戦史館

戦史館だより

2016年7月31日発行
 戦史館事務局〒029-4427
 岩手県奥州市衣川区陣場
 下41 齋オフィス花岡
 編集発行人 花岡千賀子

会長理事 岩渕 宣輝 専務理事 大瀧 久治 ☎0197-52-3000 FAX 0197-52-4575

覚書更新に向けて 二国間協議 動き出す

まず前年度までの遺骨帰還についておさらいしましょう。パプア州(西ニューギニア)の政府派遣遺骨帰還は、1999年以降14回派遣されて1568柱が帰還できましたが、14回のうち2回がゼロ柱帰還！ 2012年は収容した遺骸が目の前にあるのに連れて帰れない…前代未聞の事態に両国が真剣に取り組み、翌年11月に両国政府間で「パプア州に於ける遺骨の収容と帰還に関する覚書」が締結されました。教育文化大臣の“遺骨帰還は人道上の問題であり日本人兵士の遺骨は考古学的調査の対象ではない”という発言に安堵しました。

昨年2015年は終戦70周年の節目、未送還事業の仕上げの年として、これまで収容できなかった地域…スピオリ島方面やジャヤプラ近郊ベラップ村から、多数の帰還が見込まれていました。しかし10月、スピオリ方面の遺骨帰還が大使館の失態で二度目のゼロ柱となり追い打ちをかけるように、遺骨帰還の覚書が(2年毎に両国の合意で延長されることになっていたにもかかわらず)11月で失効してしまったことで、パプア州への渡航は不可能となってしまいました。更に今年2月、ジャヤプラ近郊プアイ方面の遺骨帰還予定も、インドネシアの許可がおりずに延期となってしまいました。

パプア州がだめならば(覚書はパプア州限定なので)覚書の対象となっていない西パプア州の州都マノクワリからビントニ・ヤカチ方面へ今後の覚書に向けた情報収集を計画し厚労省、大使館と共同で準備を進めました。インドネシア外務省も当初は同行する意向でしたが、渡航3日前に教育文化省からストップがかかりました。理由はいつものように、「先にインドネシア側の調査が済んで、遺骨が現地の人のものでないことを確認してからでないと日本側の調査は不可」というものです。スピオリの無人島で遺留品と共に日本兵の遺骸が発見されたときも同じ理由でしたが、考古学的調査が必要というばかりでインドネシア側の調査は、いつまで待っても始まらないのです。

今年6月、例年より1ヶ月遅れて厚労省委託のH28年度未送還情報収集事業がスタートしましたが、覚書が締結されるまではパプア州へ現地調査に入ることはできません。何とかこの状況を打開しようと、7月13日～16日、厚労省の専門官2名と岩渕がジャカルタへ交渉に出かけるところから、今年度の活動は始まりました。今まで、インドネシア側に問い合わせをするたびに「現地の地方自治体の意見を各地で会議して取りまとめるのに時間が必要…」の繰返しでしたが、ようやく7月中に、覚書を締結する条件について提案するという回答を得ることができました。

今までパプア州は戦後賠償もなく、それに代わるODAやジャイカの援助も行き届かない地域で、地方では長年の不平不満がたまっています。日本政府には、出来る限りの支援を本気で考えて実行してほしいところです。戦史館が未送還情報収集事業として活動できる残された時間はわずかですが、一步でも前進して粘り強く覚書更新に近づきたい。

遺骨収集のための新法人 7月1日 設立

「一般社団法人日本戦没者遺骨収集推進協会」が設立されました。遺骨収集推進法の10条に、厚生労働大臣が遺骨の情報収集、遺骨の収容、帰還までを行う一般社団法人または財団法人を“全国を通じて1個に限り指定する”と明記されているとおり、遺骨収集の事業をするために設立された法人です。この法人が厚労省の遺骨収集業務を行うためには膨大な申請書類を提出し「指定法人」に指定されて、漸く委託事業の開始となるわけです。

遺骨帰還事業に関わってきた12の民間団体がそれぞれ役員を推薦し、戦史館からは非常勤理事8名の中の一人として岩渕宣輝が加わり、太平洋戦史館は「日本戦没者遺骨収集推進協会」の「社員」として参加することになりました。

会長は参議院議員の尾辻秀久氏。尾辻氏が鹿児島県議会議員だった40年近く前、当時パプアニューギニア国営航空勤務だった岩渕は、尾辻氏からブーゲンビル（尾辻氏の父の戦没地）で遺骨収集のノウハウをみっちり教えて戴いたご縁があります。旧知の尾辻さんと再会して、その原点に戻ったような思いです。（写真は2005年千鳥ヶ淵、当時厚労大臣だった尾辻氏に、岩渕が「明日パプアへ調査に出発です。政府も早めに動いてくださいね」とお願いしたときに撮影。戦史館だより51号に掲載）



4月に施行された“遺骨収集推進法”は戦史館だより104号で概要をお伝えしましたが会員の皆さんから「8年間で集中して活動するためだけにわざわざ一般社団法人を作るのか？ 中二階のような組織か？ 法律で国の責務と明記されているのに委託？ 外注？ 丸投げか？」と疑問の声も聞こえてきます。

新法人を設立する過程で葛藤もあります。たとえば「設立趣意書」あえて言葉にこだわると、文章の最後の2行に「内外110万余の還らざる遺骨を1柱でも多くお迎えすることにより英霊の慰霊と顕彰に尽くし、ご遺族や関係者の期待に応えることを、ここに決意いたします」と書かれています。12団体寄せ集めの新法人なので、いろいろ違う考えがあるのは当たり前で、英霊の顕彰と考える団体も存在することは理解できます。それを理解したうえで岩渕が発言しました。「英霊の顕彰として戦没者をカミとして祀る考えもあるだろう。しかし戦史館では、人は死んでも人なのだから一人ひとりの死者の人権を大切にしたい。最後の一兵の帰還を目指して…実際には最後の一兵は不可能でも、そのことを次の世代に伝えたい！ 遺骨帰還は、集中期間8年で終わらせるようなものではない」と。

一般社団法人として、様々な規則や組織体制を作り、登記までの数カ月間に指定法人としての参加資格…体裁を整え、厚労省の公募締め切りに間に合うよう「基本的な計画書」が7月末の理事会で承認されました。今年度は各戦域別に未送還情報収集事業の最後の年ですが、H29年度からは各地で積み上げてきた実績やノウハウを新法人全体の共通のものにしようと期待されます。戦史館は戦後処理を通じて、平和を護ってほしいと“避戦”を強く願う一方、会員参加の現地調査では体力気力が限界に近づいてきている今、これまでの経験を、新たな法人の“機動力”に引き継いで伝えたい。機動力…新法人による遺骨帰還事業の次の課題は、実働部隊となる職員やスタッフをどう集められるかにあります。

千鳥ヶ淵戦没者墓苑で拝礼式 今年も

毎年5月最後の月曜日に行われている千鳥ヶ淵での拝礼式が今年も5月30日に行われ、前年度に海外から帰還した戦没者2337柱が納骨されました。拝礼式は、海外で戦没し遺族に引き渡すことのできない遺骨を納骨する式典です。(写真は石井淳子厚労省社会・援護局長が象徴遺骨を塩崎厚労大臣に手渡し、大臣の手で納骨が行われます。)

戦域別では、硫黄島77柱、ビスマーク・ソロモン諸島 616柱、東部ニューギニア 141柱、中部太平洋 51柱、樺太・千島30柱、フィリピン 4柱、インドネシア 2柱、ミャンマー 1柱、旧ソ連1408柱、地域不明 7柱と報告されています。昨年10月インドネシアパプア州スピオリ方面からの帰還ではゼロ柱だったのですが、2柱というのはどの方面からの帰還？今年も戦史館からの式典参加者はいなかったのも、後日、厚労省に問い合わせました。



厚労省によると、2015年11月に同省が長崎県で受領した遺骨とのこと。1987年に長崎県の民間団体がインドネシア沖で沈没した軍艦『足柄』の潜水艦内の調査を行い、その船内から引き揚げられた日本人戦没者のご遺骨が、その団体の会長宅に安置されたままになっていて、その方が他界したことで、その親族の関係者が千鳥ヶ淵への安置を申請した…」ということがわかりました。

インドネシアの遺骨収集は1975年に厚生省が概ね終了と宣言した後、1999年に戦史館会員の要請で再開されるまでの間、政府による遺骨帰還は行われていないはずですが。

船内で発見された遺骸はその2名だけなのでしょうか？ 他の人は？ どうやって日本兵と証明されたのでしょうか？ インドネシアは沈没船の引き揚げには神経をとがらせると聞くが、スムーズにOKされたのでしょうか？ 『足柄』以外の船舶…徴用されて沈没した多数の民間の船や乗組員は、こういうカタチで帰還できたのでしょうか？ 次々に疑問が浮かびます。

『足柄』の沈没記録には、乗員 853名と陸兵 400名が救助されたと記されていますが、厚労省に『足柄』の調査に関する記録はなく、この民間団体から報告を受けたかどうか不明とのこと。厚労省の回答からわかったことは、インドネシア政府の遺骨持ち出しの許可を得て日本に持ちかえたものであり、専門家の鑑定では日本人戦没者である可能性が高いということで受領した」とのことでした。佐世保に1972年に建立された『足柄戦没者の鎮魂碑』には戦死者三百余名と刻まれているそうです。今年度、千鳥ヶ淵に納骨された2柱はそのうちのふたりなのでしょう。

「一般的に、海そのものが戦没者の永眠の場所であるという認識に基づき、海没した戦死者の遺骨については、原則的に遺骨収集は行わないこととされている」のだそうです。その認識とは、旧海軍の考えをそのまま引き継いでいるということでしょうか？ 戦没者の遺族も同じ考えなのでしょうか？ この2柱をはじめ、海没した戦死者について、国内情報収集としても、これ以上の聞き取り調査は不可能ということでした。